

2018年1月14日<降誕後 第2主日礼拝>

飯川雅孝牧師

招詞：コリント一9：23-27 聖書：テモテへの第二の手紙4章1-8節

説教： 『2018年の初めに』

## 1. 神との出会いの出来事

わたしたちは、日常生活の中で大きな心配事がないと、自分の人生はこれでいいのだろうか、あるいはどうなるだろうか、場合によっては自分はまっとうな人間だろうかと本気で考えることはなかなかありません。しかし、何か大きな挫折をした時とか、大きな問題が出た時、生き方そのものを考えさせられる時があります。この一年に目を向けた時、**31歳を目前に「余命5年」 大切なものを知った女性経営者** という記事に出会いました。その方は病気で突然の余命宣告を受けた若い女性が、外見では分からない病気や障害があることを周囲に知らせる「ヘルプマーク」の普及に取り組んでいる。家族らの支えに幸福を感じながら、「**今日一日を大切に**」との思いを胸に前へ走り続けている。三重県四日市市の小崎麻莉絵（こぎきまりえ）さんという34歳の方は3年前に医師から血液が正常につくれなくなる病気と知らされ時、両親の姿を思い浮かべ泣き腫らした。それまで、大学卒業後、ホームページ制作会社を設立し順調に來たが、いつかトイレも呼吸さえも苦痛になった。「地獄の思いをした。」しかし、医師の言葉が強く心に残った。「泣いても笑っても同じ5年。できるだけ笑っていきましょうね。」診断の翌日、友人が次々と誕生日を祝ってくれた。母親は「死ぬわけないやん」と励まし、父親はシュークリームを持って毎日見舞いに來た。骨髓を提供できないことを知った弟は悲しそうだった。「本当に大切なものは何か。強く感じるようになった」そこで、思い直して、職場復帰すると支援してくれる人も出て來た。「病気でできないこともある」と伝えると、近くまで出向いてくれる顧客も現れた。そこで、「大事な人と長く付き合えば、仕事はそんなに減らない」と気づいてやる気を出した。今、力を入れるのが「ヘルプマーク」の普及だ。この「ヘルプマーク」は電車の中で「わたしたちは外から見えない疾患をかかえています。申し訳ありませんが、病気のため、席をお譲りすることができません。」とメッセージを伝えるマークです。小崎さんが病気になった時、電車で優先席に座ると、お年寄りから「若いのによくそんなところに座るな」と嫌味を言われた。そんな時、東京都が12年に導入したヘルプマークを知った。病気を伝える文章とマークを添えた自作のプレートをかばんにつけると、高齢の男性から「頑張ってるな」と言われた。「満員電車で押されて人工関節が砕けた」「視覚障害だけど誰も気づいてくれなかった」という人もいた。普及活動を始めた。病気になってから知り合った今の夫から、「『今日一日が大事』と言うあなたの笑顔に打たれた。」と結婚を申し込まれた。今もめまいや過呼吸に襲われることがあり、昨年末には白血球の値が急に下がった。「天に召される日が来るかも」という覚悟はある。それでも、病気になってから幸せを感じることも多くなった。「命が続く限り、

世のため人のために動き、巡り巡って自分がもっとうれしく過ごしていけたら、すてきだと思います」ということでもあります。このような状況の中で必死に生きている姿に篤いものを感じました。

## 2. 2018年の初めに：聖書の言葉に聞いた内村鑑三の生き方に学ぶ

### 1) 聖書の知恵「シエマの祈り」

さて、今を大切に生きることについて、死という究極的な問題は背後にあるとしても、現実的には日々の生き方が継続できる生活の仕組みの中に自分を置くことが、着実にこの世を歩み、最後の目標に到達すると考えます。キリスト者にとって生活規範としての旧新約聖書にはそれを書いた人たちのわたしたちに対する奥深い思いやりがあります。古代イスラエルの民は大国に挟まれて、民族が滅ぼされるような危機を幾度となく体験しましたので、それを乗り越える知恵を伝えています。その中心に「シエマの祈り」、申命記第6章4節（シエマ・イスラエル：שמע ישראל；「聞け、おお、イスラエル」）があります。ユダヤ人は今でも朝夕2度毎日唱えています。エジプトの惨めな奴隷から神に救い出されたことへの感謝の思いに戻り、初めからやり直したのです。新約になって、今日の招詞にあるようにイエスキリストはこの原点に立って言います。「心を神に向けなさい。神が一番喜ばれることと、『周りの人を思いやりなさい。』」と。神の言葉は受け止める心がなければその人は変わる機会が与えられません。イエスは「わたしは言う。聞く耳のある者は聞きなさい」と言います。わたしたちには誠実さが求められています。

### 2) 内村鑑三の『一日一生』の意味するところ：信仰の生涯を送るために

そこで、襟を正すと言う意味で、週報に内村鑑三の言葉を載せておきました。内村は現代の預言者と言われるように、明治から大正にかけ、この世の体制的な問題に対してキリストに従い、批判的な生き方をしました。将来の日本の指導者となった多くのキリスト者を育て、その流れは無教会系のキリスト教団体となって現在に至ります。彼の著作『一日一生』からは真摯な信仰生活生がにじみ出ています。この書は、一日ごとに聖書の言葉を掲げ、それを解説して読者に信仰を紐解いています。序文には「一日は貴い一生である、これを空費してはならない。そして有効的にこれを使用する道は、神の言を聴いてこれを始めるにある。一日の成敗は朝の心持いかんによって定まる。朝起きてまず第一に神の言を読み神に祈る、かくなしてはじめし日の戦いは勝利ならざるをえない。よし敗北のごとくに見えるも勝利たるよう疑いなし。そしてかかる生涯を終生継続して、一生は成功をもって終わるのである。…」

### 3) パウロの生き方と重なる内村の生き方：祝福された信仰の生涯の証

今日の聖書はパウロのテモテへの書簡です。パウロの伝道には常に敵対者から命を脅かされるような危険が伴いました。彼に忠実なテモテは同じように彼と苦難をともにしましたから、どれだけ、深く彼を愛したことでしょう。その中には間違った教えを伝える強力な異端を排

除するための戦いもあります。「だれも健全な教えを聞こうとしない時が来ます。そのとき、人々は自分に都合の良いことを聞こうと、好き勝手に教師たちを寄せ集め、真理から耳を背け、作り話の方にそれて行くようになります。」この世の仲間と徒党を組むので手ごわいのです。その戦いに勝つためには「しかしあなたは、どんな場合にも身を慎み、苦しみを耐え忍び、福音宣教者の仕事に励み、自分の務めを果たしなさい。」と励まします。それは遺言でもあります。「わたし自身は、既にいけにえとして献げられています。世を去る時が近づきました。」そして、最後の言葉を語ります。「わたしは、戦いを立派に戦い抜き、決められた道を走りとおし、信仰を守り抜きました。今や、義の栄冠を受けるばかりです。正しい審判者である主が、かの日にそれをわたしに授けてくださるのです。」

人生の最後にこのような言葉を語ることが出来るのはどのような人でしょうか。週報にも挙げたように内村を生涯の師と仰いだ弟子の山本泰次郎は内村の生き方の証人として読む者に感動を与えます。内村が若い頃、礼拝は神にだけするもので、天皇にするのではないとの一高不敬事件の時の国を挙げての非難や、信仰のあり方に対して当時のキリスト教会の異なる見解に対しても妥協することがなかったために日本のキリスト教会に受け入れなかったこと、軍国主義が台頭する中での非戦論に対する軍閥の迫害などにも戦い抜いて信仰を築き上げたこと。その血と汗の涙の結晶としての神の恩恵を内村から直に肌を譲り受けた感謝の思いを吐露しております。「この書には事実と体験に裏打ちされない文字は一つもない。一言一句の末にいたるまで、そのことごとくが、人生の戦場と信仰の荒野において、血と涙と汗の苦難・苦闘と、水と火の試練・死闘を経て、勝ち得た勝利の凱歌であり、栄光の讃美歌である。・・・人生の苦難に泣き、靈魂の苦悶に悩む人の友である。・・・」と。

このように内村の戦いの生涯は今日テモテに語ったパウロの手紙に重なっております。「キリストの救いに与った自分は、感謝の思いが大きい。だから、キリストに喜んでいただけるように、自分の周りの人にもそれを伝えて来た。だから、君たち、わたしから福音を伝えられた者は、苦難に向かって福音伝道に喜んで進むはずだ。」と。

そして、内村は臨終間近の2日前、古希、70歳の祝いのために集まった人々に語ります。

「神の造ったすべてのもの、宇宙も、万物も、人生も、は良い。」と天地創造の神を讃美し。

「言いたいことはいっぱいあるけれども言いきれない。人類の幸福と、日本国の隆盛と、宇宙の完成を祈る。」彼はパウロの「今や、義の栄冠を受けるばかりである。」の心境に立ったのではないのでしょうか。墓地、多磨霊園の碑には 25歳の時に志した言葉「余は日本のため、日本は世界のため、世界はキリストのため、そしてすべては神のため」とあります。

新年の初めに、内村鑑三の残してくれた精神、「余命5年」と言われている女性の生き方から学ぶことは多いのではないのでしょうか。この一年をお互いに心を引き締めて歩み出したいと思います。